

Juichi WAKISAKA Race Report

2015 AUTOBACS SUPER GT Round 3 - BURIRAM SUPER GT RACE -

◆◆ タフな戦いを耐え抜き、9位フィニッシュ ◆◆

No. 19 Weds Sport ADVAN RC F		
Drivers	Qualifying	Final
脇阪 寿一 / 関口 雄飛	8位	9位



■大会概要

開催日：2015年6月20日-2015年6月21日

サーキット：チャン・インターナショナル・サーキット（タイ、コース全長：4.554km）

レース距離：66周（300.564km）

入場者数：予選日16,000名、決勝日38,000名、合計54,000名

6月20-21日、タイ・プリアム県にあるチャン・インターナショナル・サーキットにおいて2015年 SUPER GT 第3戦「BURIRAM SUPER GT RACE」が行われた。脇阪寿一がパートナーの関口雄飛選手とともにドライブするNo.19 WedsSport ADVAN RC Fは予選8番手からスタート、暑さが厳しいタフなレースを走破し、9位でチェッカー。3戦連続の入賞、ポイント獲得に成功している。

■6月20日(土)

10:00-11:45 公式練習

15:20-15:35 ノックアウト予選（Q1）

16:05-16:17 ノックアウト予選（Q2）

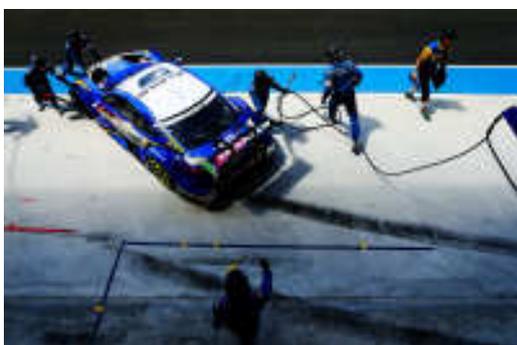
【公式練習】 13番手 / 1'27.126

SUPER GT 唯一の海外戦の舞台、「チャン・インターナショナル・サーキット」は、タイの首都、バンコクから北東におよそ400kmの位置に設けられた国際格式のサーキット。昨年の一戦はサーキットのこけら落としイベントとして開催され、多くの話題を集めた。今年も精力的なPR活動の効果もあってか、土曜日にはおよそ1万6千人もの地元ファンがサーキットへと足を運んだ。

まず、朝の公式練習。予選に向けての準備を行うべく、まずは関口選手がタイヤのセレクト、クルマのセッティングなどを確認する。その後、脇阪がドライブを担当。決勝用のセッティングを確認するためガソリンを積んだ状態のクルマでコースへと向った。

ロングランでしっかりと確認を行いたいところだったが、途中赤旗中断もあり、走行は5周ほどで終了。それでも終盤にはアタックを想定した走りを行うなど、精力的にメニューを消化した。

なお、このセッションは、1分27秒126のタイムを刻み13番手で走行を終了している。



【ノックアウト予選（Q1）】 2番手 / 1'25.576

午後の予選を迎えるまでに気温36度、路面温度58度まで急激に上昇。そんな中、Q1のアタッカーを務めたのは関口選

手。アタック毎にタイムアップし、1分25秒576のベストタイムをマーク、2番手に浮上した。これによりチームは今シーズン初のQ1突破を実現。脇阪にとっても今季Q2初出走のチャンスが巡ってくることとなった。

【ロックアウト予選（Q2）】 8番手 / 1'29.081

インターバルの間、脇阪はチームにセッティング変更をリクエスト、フロントの車高を下げてアタックに向った。コースインした脇阪は丁寧にタイヤを温め、3周目にアタックを開始。だが、130Rに入ったところでクルマの底面が路面に当たり、そのタイミングでクルマが跳ねてスピンを喫してしまう。幸いにしてクラッシュは免れたが、スピンの際、4本のタイヤともフラットスポットを作ってしまった。これにより、脇阪はアタックを断念。クルマをピットへと戻した。

「関口選手がすばらしいアタックをしてQ1で2番手になることができました。これでクルマのポテンシャルがキチンと証明されたと思います。Q2も同じセッティングのまま出走しても良かったのですが、アタックを終えた関口選手のコメントから、もう少しクルマをよくしたいという気持ちが大きくなりました。アンダーステア傾向にあったので、結果、フロントのグリップを上げるためにフロントの車高を下げることにしました。しかし車高が低すぎたのか、裏目に出てしまいました」。結果を残すためのチャレンジを振り返った脇阪。その表情はとても厳しく、悔しさで溢れるものだった。「Q1で2番手を獲れるクルマでアタックし、そこでミスをした責任を感じています。上位を狙えたのに、こういう結果になってしまいファンの皆さんをはじめ、関係者の皆さんに大変申し訳なく思っています」と続けた。

一方、気になるのは決勝スタート時のタイヤ抽選。結果はQ1で関口選手が装着した「A」に決定。「もしBが選ばれていたら、フラットスポットができたタイヤを使用する訳にはいかないの、タイヤを交換してピットスタートをしなければいけないところでした」と安堵した脇阪。「8番手と2番手とは大きな差ですが、ピットスタートではなく8番手からスタートできるということに感謝し、決勝ではあらためて精一杯頑張りたい」と気持ちを切り替えた。



■ 6月21日(日)

09:50-10:20 フリー走行 (10:30-10:50 サーキットサファリ)

15:00- 決勝 (66周)

【フリー走行】 5番手 / 1'26.826

決勝日も強く、まぶしい日差しが照りつけたチャン・インターナショナル・サーキット。この日は3万8千人強の観客が来場した。フリー走行、そしてサーキットサファリのセッションでチームは決勝に向けての最終チェックを入念に実施。No.19 WedsSport ADVAN RC Fは5番手のタイムで走行を終え、準備が整っていることをアピールした。



【決勝】 9 位 / 2 ポイント獲得（シリーズポイント：7 ポイント、シリーズランキング：13 位）

午後 3 時からの決勝を前に、気温は 37 度、路面温度は 50 度へと上昇。前日の予選アタック時よりもやや低い数値ではあるが、暑さに対して厳しい戦いになることは言うまでもない。No.19 WedsSport ADVAN RC F のステアリングを最初に握ったのは、脇阪。今季初のスタートドライバーを務めることになった。大きな混乱もなく、オープニングラップを終え、戦略に合わせた走りを実践するが、タイヤがウォームアップするまでの間に後続車の先行を許すことになる。思うようなペースアップができず歯がゆい走りを強いられる中、さらに他車からの追突もあって、本来の走りをなかなか見せることができない。

一方、チームは状況を変えることでさらなるチャンスを探ろうとピットインのタイミングを変更。異なるアプローチでポジションアップを狙うため、27 周を終えた時点でルーティンワークを敢行。関口選手へと交代する。

前日の予選から力強い走りを見せていた関口選手は、決勝でも寸分たがわぬ速さで周回。僅かなチャンスをものにすべく、素晴らしい追い上げを見せたが、惜しくも逆転の機会は訪れず、結果 9 位でチェッカーを受けている。



「スタートを担当しましたが、前半では思うようにペースを上げることができず、後続車に抜かれて後退してしまいました。その後もペースはあまり上がりませんでした」とレース前半の厳しい状況を振り返った脇阪。さらに黄旗区間では他の GT500 車両にプッシュされ、大きくタイムロスしたことを明らかにした。

「関口選手はいいペースで追い上げを狙ってくれましたが、9 位が精一杯でした。今週末は予選、決勝を通じて色々とお迷惑をかけることになってしまいました。表彰台も狙えたのではないかと思います。至らないところを徹底的に洗い出し、次のレースに挑みたいです。もっといい仕事をします。僕自身まだまだ進化できると思うので、次の富士では成長した姿をお見せしたいと思います」。大きな悔しさをバネに、走る限りはさらなる進化と成長を追求する…。それが脇阪が目指すドライバーとしての姿といえるだろう。次の舞台、第 4 戦富士での活躍に期待がかかる。

次戦は、8 月 8 日(土)-9 日(日)に富士スピードウェイ（静岡県御殿場市）で開催される。

[Photo Gallery]



